

学びの力を育む
乳幼児のための
コーディネーション
トレーニング



近江八幡市



はじめに

人間の赤ちゃんは、他の哺乳動物と比べると未成熟のまま生まれ、遺伝的要因に完全に支配されることなく成長する特徴があります。未成熟であるからこそ、人間は多くの可能性を持って成長できるといえるでしょう。また、遺伝的に支配された能力であっても、それらを様々な方法で組み合わせることによって、創造的に新たな能力を得られるというのが私の考えです。そこで、「要素を組み合わせる能力」を“コーディネーション能力”とし、それを実現するための「学び」を“コーディネーショントレーニング”として位置づけています。トレーニングというと特別な身体運動と思われるかもしれませんが、決してそうではありません。“コーディネーショントレーニング”には、生活の中に生かせる実践が多くあります。

本冊子は、乳幼児の豊かな可能性を引き出すための子どもとの触れ合いを、コーディネーション論の立場から紹介するものです。本冊子では「感覚」「運動」「コミュニケーション」、さらには、これらを総合化した「知性」といった4つのテーマに分けて紹介することにしました。本来は、どのテーマも区分されるものではありませんが、日々の生活の中での子育ての課題としては、取り組みやすいのではと考えて、4つのテーマとしています。それぞれのテーマが、子どもとの触れあいの中で、何かのお役に立てればと思う次第です。ご両親、ご家族の皆さんは子育てに夢や希望を抱くことでしょう。その一方で、心配や不安も感じることもあるかもしれません。そうした時に、本冊子が一部でも参考になれば幸いです。



あら き ひで お
荒木 秀夫

徳島大学名誉教授

- 学位：学術博士（筑波大学）
- 専門分野：運動行動制御論
- 現所属
 - ・株式会社 MP and C
アドバイザー
 - ・非営利法人
日本コーディネーション
トレーニング協会理事長

先生の紹介

運動生理学を専門として、脳科学を基盤にした運動と行動の制御を研究テーマとしている。長年の研究と実践の中から脳の刺激感受性の向上を目的とした独自のコーディネーション論を展開。新しい運動観に基づいたトレーニング法や学習法の普及に取り組んでいる。

対象は幼児・子どもから高齢者、障がい者、トップアスリートまで幅広く、その内容はスポーツ分野にとどまらず、音楽、教育、医療技術、矯正スキルなど多岐にわたり、東京都教育委員会の「総合的な子供の基礎体力向上方策（第2次推進計画）」において、都内公立学校（幼・小・中・高・特支の2400校）へのコーディネーショントレーニングの導入など教育現場での注目が高まり、各地の教育委員会等における事業にも参画している。

目 次

はじめに	P1
I. 感覚の章	P3
II. 運動の章	P6
III. コミュニケーションの章	P10
IV. 知性の章	P13
“子育て”と“子どもの育ち”～まとめと補足にかえて～	P17



1. 感覚の章

乳幼児の「感覚統合能力」

乳幼児の感覚能力は、個別に発達するだけでなく相互に関係し合って発達します。これがコーディネーション論における“感覚統合能力”です。この能力があるからこそ、各感覚能力も高度に発達するという相互の関係が見られます。人間以外の哺乳動物は、嗅覚・味覚が重要な感覚となるのですが、人間の赤ちゃんの場合は、感覚統合能力によって複雑に他の感覚の影響を受けるようになります。

感覚統合能力の発達には主導的役割を担う特定の感覚刺激があります。それは年齢とともに変化しますが、乳児の場合は皮膚や筋肉からの刺激による「身体感覚」が中心となります。幼児へと成長すると、聴覚や視覚などの外部からの刺激が中心となりますが、他の感覚も感覚統合能力を支えるので、バランスよく様々な感覚刺激を与えることが大切です。乳幼児は常に感覚刺激を求めています。心身の成長の第一歩は、まさに多彩な感覚刺激にあるといえます。

学びの心を育む皮膚感覚

乳児の感覚統合の発達に主導的な役割を担う身体感覚として、特に皮膚への刺激が重要です。身体感覚は脊髄の神経回路で運動神経と密接につながり、脳においても意識を支える前頭葉と緊密な関係を持っています。最近の研究では、人間の皮膚感覚が精神的要因に深く関係することが明らかにされています。

泣き叫んでいる赤ちゃんを抱きかかえる時、服の上からではなく直接肌に触れて抱いてあげると泣き止むことがよくあります。これも皮膚への刺激の大切さを示しているといえます。皮膚に刺激を与える効果を考えれば、タオルで濡れた体を拭いてあげるのは、感覚統合能力とともに個々の感覚能力も高めて心を育むことにもなりますので、肌触りの違ったタオルを使い分けるなどの工夫をすると良いでしょう。



こうして、皮膚感覚を中心に感覚統合能力が刺激されることから、乳幼児は本能的に身体感覚を求めるようになります。触られたりする受動的な刺激に対して反応することから、次第に自分で身体感覚を幅広く求めるようになり、自分から何かに触れたり、いじったりするようになるわけです。幼児となれば、さらに積極的に動いていろいろな物を操作しようとする行動へと発展していきます。このことが運動欲求につながりますので、感触、大きさ、重さ、硬さなどが違った身の回りの品物を触らせてあげるようにしましょう。

感覚を求める「動き」の始まり

乳児から幼児へと成長するに従って、身体感覚の欲求は、他の感覚の欲求へと広がっていきます。つまり、「多くの感覚を得るために動く」ようになります。なかなか目が離せない時期です。大人が鉛筆で何かを描くと、幼児はその鉛筆を握ろうとします。これは「絵を描く」ことに興味を示したように見えますが、本質的には「絵を描くことによる感覚を得る」という欲求が根本にあります。自分がクレヨンを動かして色鮮やかな絵が現れる、クレヨンが紙にこすれてキュツと音がする・・・これに脳が反応するわけです。つまり「犬の絵」を描くとしても、感覚を得ようとする欲求を土台として、そこから「正確な犬の絵」への関心が芽生えるようになります。重要なことは、このような幼児の家の中でのささやかな動作が、やがて、全身を使った運動欲求へとつながることです。外遊びのような全身運動が積極的になると運動能力は発達しますが、それに伴って視覚や聴覚といった様々な感覚能力を取り込むようになり、このことが、感覚統合能力を急速に発達させていきます。

「動く」ことで広がる視覚・聴覚の世界

幼児は身体感覚を求めて動くことによって視覚や聴覚などの感覚能力を高めるとともに、さらに感覚統合能力を急速に発達させることは先に述べたとおりです。聴覚は胎児の時から個性的な発達が見られることはよく知られています。お母さんのお腹の中でよく聴いていた音楽や言葉に対しては、誕生後も強い反応を示します。「この音だったのか!」と言わんばかりの反応ですね。一方で、視覚はお母さんのお腹の中では明暗ぐらいしか感じていません。それでも視覚の回路は機能していて、誕生後に多くの視

覚情報が入ることにより脳の高いレベルでの情報処理が急速に発達することになるわけです。それには、他の感覚との組み合わせが大きな役割を担っています。

幼児がよちよちと壁に貼ってあるカレンダーに向かって歩くと、近づくにつれてカレンダーが大きく見えるようになります。おもちゃをいじると音が聞こえてきます。強い力で大きな音がする・・・、すると幼児は力いっぱい物を投げたり叩いたりするようになります。こうして動きによって視覚や聴覚の情報処理は高まることになります。

「ほうかんきょう豊環境」が育む感覚統合能力

脳は感覚、運動、思考などを統制する視覚野、聴覚野、言語野などといった領域に区分されます。各領域は相互に関係し合うという典型的な感覚統合能力の役割を持ちますが、何らかの障害を持った人、例えば、聴覚障害者が手話でコミュニケーションを取っている時には、視覚野だけでなく「聴覚野」も活発に活動します。また、視覚障害者が点字を読んでいる時には、体性感覚野だけでなく「視覚野」も活発に活動します。つまり、見えなくても「見ている」、聞こえなくても「聴いている」ことになります。感覚統合能力によって、ある感覚機能に障害があったとしても、他の感覚機能が支えるわけです。障害の有無に関わらず、乳幼児の感覚能力の発達が感覚統合能力の発達へと向かうと、音楽、芸術、学業といった特定の分野で能力を発揮することがあるのは、まさに感覚統合能力の為せる技です。

動物行動学や脳科学の分野で「豊環境」という言葉があります。哺乳動物は様々な刺激に満ちた環境で育つと知的能力が発達することを意味しています。子ども達には、いろいろな感覚刺激に満ちた環境づくりが大切です。昔からの「でんでん太鼓」というおもちゃがあります。かつては子ども達の遊び道具として親しまれていたのですが、このおもちゃは視覚、聴覚、身体感覚が組み合わさった遊び道具です。感覚を組み合わせることが大切という思いは昔からあったのではないのでしょうか。



II. 運動の章

「中遊び」と「外遊び」

先進国では精神的な疾患、青少年の犯罪、免疫系の疾患などの問題について、数多くの研究から、運動によって改善されるという結果が報告されています。ここ十数年にわたる子どもの運動効果の研究においても、脳の働きを促す物質やホルモンが活性化されることや、情動的活動が安定することなど、心身の健康に幅広く貢献することも分かってきました。しかし、運動なら何でも良いというわけにはいきません。

子どもにとって運動は、どのような運動をどのように行うのか、遊びとの関係は・・・といった様々な面から見ていく必要があります。特に、乳幼児にとっての運動は、運動能力の面からだけではなく、感性や知性の発達を含めた心身の問題から見ていく必要があるはずです。幼児はボール遊びや鬼ごっこといった外遊びとともに、お絵描きや積み木遊びなどの中遊びも大好きです。実は、中遊びは外遊びへの欲求と深く関係しています。コーディネーション論では、中遊びは外遊びと一体となって、「運動効果」を得ることができると捉えています。その前提として、「遊び（play）」の要素があるかどうかということが最も重要な点となります。



「動体認知」から始まる運動欲求

遊び心から運動欲求を引き出すのは、乳児の時の「動体認知」、つまり動く物に対する認知がきっかけとなります。これが中遊びに見る「ささやかな運動欲求」を引き出します。赤ちゃんに人形を見せる時、人形を左右に振ったり、くるくる回したりしませんか。赤ちゃんは動くものが大好きですね。動くものを見ると乳児は手で触ろうとします。この行動は「動きの意味」を知ろうとする本能としての表れです。同じように、積み木は真っ直ぐに落ちるのに、紙は揺れながら落ちるといった現象の「理由」を探ろうとします。乳幼児が見る、積み木を高く重ねていき、ある高さになって崩れる様子は、大人が見るのとは違った光景なのです。

幼児が、積み上げた積み木は崩そうとし、バラついている積み木を積み上げようとするのは理に適った行動です。そのため、積み木の重さや形、ボールの大きさや重さが違ったものが混ざった遊び道具は大変良い有効な効果をもたらします。特に、河原で石や木切れで遊ぶのは理想的ですね。大きさが同じでも重さが違う、表面がツルツル、ザラザラと違ったいろいろな石を積み上げたり並べたりするのは、人間本来の脳が求めている刺激といえます。何しろ、人間は自然環境の中で脳を進化させてきたからです。

感覚刺激が引き出す主体的な運動

乳幼児では成長とともに感覚を求めて動き始める中で、その動き自体が感覚統合能力を高めるための視覚や聴覚刺激を主体的に取り込むことにつながります。乳児は何かをいじることで音が鳴る、形が変化するといった様子に興味を示します。これは、身体感覚を視覚や聴覚と結びつけようとする脳の働きとしての運動です。幼児へと成長すると、さらに積極的に動くようになり、いろいろな刺激、例えば見たことがないような視覚情報を得ると、それを触り、誰かが鈴を鳴らせば鈴を握ろうとし、ピアノを弾けば自分で鍵盤を叩こうとします。このような反応から「基本運動」としての中遊びへの欲求が芽生えていきます。

こうして、乳児は「遊んでもらう」ことが中心だったのが、幼児になれば「自分で遊ぶ」ことへの欲求が強くなり、体を動かし、移動することを好むようになります。それは主体的な運動の始まりで、人間特有の直立二足歩行を発揮する原点となります。これには平衡感覚の発達が大きく関係します。乳児は、それなりに手足を意図的に動かすようになると全身を動かそうとして、より平衡能力を無意識のままに求めるようになります。よちよち歩き始めると、誰かと手をつなぎたがるのは、まさにこの傾向の表れといえるでしょう。



コーディネーション能力としての「平衡能力」

平衡能力は、コーディネーション能力の最も基礎となる能力です。ただし、コーディネーション論においては、バランスをとる能力だけではなく、力の強さや動きの速さの「基準」を定めるという能力をも意味しています。平衡能力は単に運動のためだけではなく、心の成長にも必要な能力です。大人でさえ神経系の病気とは異なる心理的ストレスによっても平衡障害を引き起こすくらいです。それだけ平衡能力への欲求は、心身ともに健やかな成長のためには欠かせない欲求です。

乳幼児は抱っこされたり揺らされたりすると喜びますし、泣き始めた赤ちゃんをなだめる時にも抱きかかえて揺すったりしますよね。高い高いと持ち上げられるのも大好きです。赤ちゃんにとっては、この揺らされる感覚は心身ともに成長するために欠かせないものです。幼児がブランコ、シーソー、滑り台を好むのは、まさに「平衡能力」を高めようとするのが背景にあります。乳児をあやしたり、幼児と遊んだりする時には、いつも意識的に身体のバランスや精神的な緊張の場面を取り入れることも必要ですね。平衡能力は、すべての運動の土台となるとともに、能力の発達そのものが心身に優れた効果をもたらすことになるでしょう。

多彩な運動へ導く「平衡能力」

平衡能力が発達すると、その感覚を楽しみ様々な運動に興味を抱くようになります。これが幼児期の特徴です。幼児は平衡能力の発達に伴って、身体を思いのままに動かす「身体操作能力」、ボールやロープなどの道具を使いこなす「対物操作能力」というコーディネーション能力を発達させます。運動能力が発達すればするほど、さらに高い「平衡能力」を求めるようになります。10代以降になっても、スキー、スケート、スケートボードなど、身体を切り替えたり、飛び越えたりするダイナミックな運動に楽しさを感じるのはこのためです。

「平衡能力」を発達させるための動きとして、まずは体幹を中心に考えることが大事です。少なくとも6歳ぐらいまでは手足でバランスを取るよりも、体幹そのものを動かすことを、中心に考える必要があります。体幹による平衡能力は、後々に手先、足先の巧みさを支えることになるからです。その結果は12歳ごろに、心身の成長の結果として表れることになるでしょう。

自由で、自主性に満ちた運動

幼児の運動は、単に運動量だけではなく質的な面についても配慮すべきことがあります。「自由な遊び」がどのくらい含まれているかということも大切な一つです。動物を使った実験で、同じ運動量でも自由に運動させた場合と、強制的に運動させた場合とでは、自由に運動した動物の脳は顕著に発達したという結果が多く報告されています。人間でも幼い時の自主的な運動は、脳の発達に良い効果をもたらすことが知られています。運動が活発な幼児にとって、強制された運動だけではなく「ご褒美をもらうための運動」も、決して良い結果は得られません。ましてや、スマートフォンなどの ICT による「遊び」では、逆に脳の発達を抑制することも研究によって明らかにされています。

自由な遊びとしての運動に加えて、もう一つ大切なこととして、極端な「受け身の遊び」にならないことがあげられます。同じ楽しさであっても「遊ぶ」ことと「遊んでもらう」こととは違います。たとえ効率が悪くても自由に動き、何かを成し遂げようとする遊びこそ、本来の子どもの心身の成長を促す原動力となります。もし、この時期に自由で自主的な運動が制限されると、青少年期になっても健全な運動欲求が低いままとなってしまいます。

まずは、幼児の時には、勝った負けた、できたかできなかったではなく、とにかく楽しい、気分がいい、そして工夫に満ちた運動遊びを心がけるようにするべきです。これが、少年期、青年期の運動と、最も異なる点だといえるでしょう。





Ⅲ. コミュニケーションの章

「感性」とコミュニケーション

コミュニケーション能力は、言葉の選択や言い回し、表情、仕草などの「動き」によって意思の疎通を図る能力といえます。これらの言葉や「動き」の要素は、共通して「感性」を伝えるためにコーディネートされるというのがコーディネーション論の解釈です。この「感性」というのは、先に触れた「感覚運動統合」と密接に関係し、言葉で表す直前に、脳内に浮かぶ漠然とした「意識のイメージ」ということになります。その仕組みは、脳の構造からも見ることができます。

脳の大脳皮質には、言語野という領域がありますが、言語野は、視覚、聴覚などの感覚野、全身を支配する運動野、さらには感情を支配する領域と密接な関係を持っています。そのため、コミュニケーションは単に言葉だけではなく、言葉の抑揚とリズム、体の姿勢、表情、身振りなどの動作とともに、見聞きする感覚情報によって大きく左右されることになります。大人の会話でも、直ぐには言葉に出せないことがありますよね。その時、思わず頭、手、指先などを動かしたりします。そうした動きによって会話が始まります。つまり「感性」を追いかけるように体の動きによって言葉が出てくるわけです。

「感性」と「言葉の壁」

赤ちゃんは、近くの大人どうしが怒鳴りあう様子を見ると泣き出し、皆が笑い出すと口元が緩んで微笑みます。つまり、大人の会話の中での喜怒哀楽を感じることができます。幼児となれば、喜怒哀楽に直結する「感性」が急速に発達します。そのため、最初に「感性」が湧き立ち、それを回りに伝えようとするために言葉を出そうとします。しかし、十分に言葉の能力が発達していないため、喜んだり、怒ったり、何かを要求しようとする時には、手足をバタバタさせたり、飛び跳ねたりしたりと動作で表現することになります。つまり「言葉の壁」を感じる時期ともいえます。

こうした経験により「感性」を伝えられないもどかしさから、少しずつ言葉のニュアンス、意味合いを理解するようになり、自身の言葉とともに相手の会話の背景にある「感性」も感じ取るようになるわけです。逆に、言葉が喋れても、この「感性」が未発達となれば、発達上に課題を抱える子どもということにもなります。コーディネーショントレーニングの中には、そのような子どもたちを支援するための特定の手法もあります。

「顔・表情」とコミュニケーション・ムーブメント

乳幼児が「感性」を言葉によるコミュニケーションへと結びつける上で重要な条件は、他人の「顔・表情」の変化を見ることです。まだ喋れない赤ちゃんに対しても、大人は常に話しかけますよね。話しかける時、子どもの表情を見ながら声をかけるはずですよ。その際、その子が普段泣く時や、何かをつぶやく時のリズムやイントネーションを真似するかのように語ることが、コミュニケーション能力を育む上で効果的な刺激となります。特に口の動き、手足の動きなどのタイミングを見計らって言葉の抑揚をつけることが、乳幼児のコミュニケーション能力を高める「コミュニケーション・ムーブメント」としてのコオーディネーショントレーニングとなります。

コミュニケーション・ムーブメントは、「動作を挟む」という方法が基本となります。例えば、大人が積み木を手にとって赤ちゃんの目の前に見せると、じっと積み木を見つめます。そこで積み木をゆっくりと左右に動かすと赤ちゃんは積み木を目で追い始め、時々積み木から目を離して積み木を持っている人の顔を見つめるでしょう。それは、相手の表情から漠然と状況を理解しようとする行為なのです。

乳児の目の前でコップを並べて並べ替える、紙を折る、積み木を重ねる、といったささやかな動作を見せながら「声をかける」・・・、そして、子どもに同じような動作をさせてあげる。これが「感性」を引き出し、乳児は漠然とした状況から一つ一つの言葉を状況と結びつけて相手の「意図を探る」ようになります。このように乳幼児は、とにかく「顔・表情」には敏感です。そして、動きを挟むことによって、そこから「感性」を学びとり、一つ一つの言葉のニュアンスを学んでいくことになります。心がけたことは、子どもに話しかける時に子どもの表情をしっかり見て、会話のリズムに合わせるように豊かな表情で接することですね。



会話の中での「論理性」と「多様性」

幼児は、3歳ごろになると、盛んに会話をするようになります。この時期の子どもとの会話は、子どもの知性の発達にも大きな影響を及ぼすことになります。コーディネーション論としては、この時期の子どもとの接触において、三つのことを重視しています。一つはこれまでに触れたように身振り手振りをしっかりとることです。そして他の二つとしては「論理性」と「多様性」があげられます。

「論理性」で大事なことは、例えば子どもが悪さをして親が叱った時に、一言でも二言でも「～～なので、ダメなの」と説明することです。「なんでダメなの・・・」と癪癪を起こしても「ダメなものはダメなの・・・」という叱り方は良くありません。子どもが感情的にも理性的にも納得しないとしても、その理由を伝えることの繰り返しが将来の知性の発達に大きな効果をもたらします。そして、「多様性」についてですが、とにかく同じ表現でなく、表現自体を豊かにするということが重要です。「お風呂に入る」にしても「湯につかる」、ボールペンも「書く物」「ペン」といった、伝えるべき内容の表現を変えたり、言葉を加えたりすることです。こうしたことは、高い知的能力を持つ子ども達が育った家庭内における親子の会話分析からも指摘されています。幼児との会話の成果は、まさに将来に関わることになります。親が子どもに「何を伝えるか」ということだけではなく、子どもに「どう伝えるか」ということを考えながら、家族との会話を工夫してみてもいいかもしれません。





IV. 知性の章

「触る環境」と「見る環境」

子どもの「知性」は、コミュニケーション能力とともに、あらゆる感覚能力と運動能力が密接に関係し合うことによって豊かに成長していきます。その拠り所となるのは環境からの刺激です。新生児、乳児の視覚や聴覚はある程度機能していても、刺激を受ける環境としては十分なものではありません。どちらかといえば「狭い環境」に囲まれているといえます。直接的な「身体感覚」への刺激という意味での「触る環境」が中心といえるからです。

この傾向は、赤ちゃんをあやす時に見ることができます。大人が赤ちゃんの目の前に積み木を見せると、赤ちゃんは積み木に向かって手を伸ばす“リーチング”という反応を示します。その時、赤ちゃんの手に触れる前に積み木をさっと引くと、赤ちゃんは特に反応しません。目で追うだけです。ところが、一旦、赤ちゃんが手に触れてから積み木を引くと、泣き出して積み木を握ろうとします。つまり、手で触った感触によって、赤ちゃんは積み木に強く反応するようになるわけです。ところが、ある程度成長すると、手に触れなくても一度見せただけで、たとえ触る前に積み木を離しても、それを目で追いながら泣き出して触ろうとします。つまり「触る環境」を超えて、見ることも関心の対象となるわけですね。情報処理する対象が「触る環境」から「見る環境」へと広がったことになります。

「近位環境」から「遠位環境」への広がり

「見る環境」は、あくまでも「触る環境」を土台としています。この触る体験が充分にあつてこそ、「見る環境」が豊かになります。コオーディネーション論では、「触る環境」と「見る環境」を中心とする総体的な環境を、それぞれ「近位環境」、「遠位環境」と定義しています。「近位環境」が中心の赤ちゃんは、いろいろなものをいじりたがるわけで、手で触るだけでなく、口にもくわえようとしています。おしゃぶりは、単にお乳を飲むこととの関係以上に、大切な意味があります。外へ出かける時に、いつもクマのぬいぐるみを持ち歩くとか、いつもの枕でないと寝ないといったことがよくありますよね。関心を持つ身近にあるものを触る、動かす、いじるといった能動的な動作は、

情報を把握するための大切な行動といえます。

乳児には、とにかくいろいろな物を与えて、触る経験をさせてあげましょう。同じスプーンでも材質の異なったものを同時に与えることも、乳児にとっては重要な経験となるでしょう。このことが目に映る情報に対しても大きな意味を与えることになります。情報処理の範囲が「遠位環境」へと広がれば、おもちゃ屋さんで駄々をこねるようになります。離れたところを指さして何かを訴えたり、訊きだしたりしようとするのもこの時期です。まさに「遠位環境」の特徴を示しているわけです。

考える遊びを支える「想像環境」

情報処理の範囲が「近位環境」から「遠位環境」へと広がると、これらを土台にして、知性を支える二つの環境へと広がることになります。「想像環境」と「創造環境」です。

「遠位環境」の次に広がるのが「想像環境」で、例えば何かの物を見せて、お皿とか布でその一部を隠したとしても、幼児は、隠れている部分を脳の中で補正して、何があるのかを理解するようになります。

幼児は、多くの経験によって「近位環境」「遠位環境」が広くなればなるほど、「想像環境」は急速に広がり、それを深めようとする傾向があります。“かくれんぼ”に興味を持つのはこのためです。そして、想像したことと大きく違ったりすると、その違いに強い関心をもつようになります。手品に興味を示すのもこのころですね。この段階になると、遊びの傾向が大きく変わってきます。それは、いろいろ考えて遊ぶというのが特徴です。こうした「想像環境」においては、視覚や聴覚に限らず、実は身体感覚が大いに支えていることが重要な点です。まさに感覚統合の成せる技といえるでしょう。



「創造環境」と「知識コーディネーション」

「近位環境」から「想像環境」に至るまでに、もう一つ将来を左右するような重要な環境が「創造環境」です。ここまでの三つの環境は、どれも現実的、具体的な環境の範囲でした。ところが、これらを全体として発展させるかのように、飛躍的に広がっていくのが「創造環境」です。そのきっかけは、ささやかな遊びの中でも見ることができます。例えば積み木で何かを作ろうとする時に「考える」ことです。「考える」といっても、知識を思い浮かべるのではなく、知識を組み合わせるという意味での「考える」ということ、つまり、「知識コーディネーション」です。積み木を適当につなげると、ふと「こんな形が面白い」といった目標を立てること、適当に落書きしていて「クマみたい」と思ったら、クマの絵をどうにか描こうとする・・・これが「創造環境」に浸っている時です。誰かに指示されたわけではありません。

こうした「創造環境」における思考は、楽しいものです。幼い子どもが何気ない提案をして、それを認めてあげると大変喜びます。幼いわが子に、「～は、どうしようかな」という問いかけは大変重要です。親として教える立場でなく「意見を訊く」という問いかけをいつも心がけましょう。成長するにしたがって、物と物、物と人との関係が、原因と結果の関係、出来事と出来事との関係といった抽象的な思考へと、幼いながらも能力を伸ばしていくことになります。独創性とは、まさにこうした経験の中から育まれるのであって、思考の原点となるものです。この能力が、小学校からはじまる学校教育の中で開花することになり、この能力が弱いと、結局、暗記するしかないという苦痛を経験することになるでしょう。



身体が支える「知性」と「知的態度」

こうして見ていくと、乳幼児の知性は、遊びと深く関係することを理解していただけたかと思います。多くの感覚や運動の積み上げが知性の発達の源となっています。大人が一つひとつを教えるのではなく、本来、子どもは生きるための本能としての「遊び心」によって知性を伸ばしていきます。大人がすべきことは、子どもが成長するために必要な「遊びの環境」を整えることです。この過程が、本稿でいうところのコオーディネーション能力を育む「近位環境」から「創造環境」への広がりということになります。

とにかく、子ども達に対しては、積み木にしても、お絵描きにしても、出来の良さを褒める前に「自分で考えたこと」について、しっかりと褒めてあげましょう。教わったことではなく、自分で考え出すことに子どもは飽きることはありません。子どもが何かを学ぼうとする意欲は、その知識や技術を何かに活かそうとする本能的な欲求なのです。それがいつの間にか、幼稚園で一番になった、クラスで一番になったから「偉い」という褒め方になっては、根本的に学ぶ喜び、知る喜びにつながりません。スポーツ、音楽にしても、誰かに勝つのではなく、自分自身との比較で、進歩しているかどうかという自覚こそが、子どもにとっての限りない成長への意欲につながることでしょう。その「知的態度」こそ、本来の自立の一步になるのではないのでしょうか。





“子育て”と“子どもの育ち”

～まとめと補足にかえて～

乳幼児の成長は実に目を見張ります。脳の成長は、その成長の過程で、その時々に必要な能力よりも、将来に向けた能力の基盤をつくることを優先します。特別なトレーニングや学習に限らず、乳幼児にとっては日々の生活の中に重要な刺激が満ちているということが本冊子で最もお伝えしたいことでした。コーディネーショントレーニングは、脳、体、心に刺激を与えて人間の潜在的能力を引き出そうとするもので、それは生活の中で工夫できることが多くあります。

いろいろな感覚への刺激が主体的な運動能力とつながり、「身のこなし」が「感性」を豊かにし、社会へ適応できる「知性」を支えます。これが、コーディネーション論における「子どもの育ち」であり、それを活かすことが「子育て」ということになります。

一つ補足させていただきたいことがあります。それは、現代のICT化社会のことについてです。この傾向は、ますます進んでいくことになるでしょう。スマートフォン、動画配信サイトといったメディアを使った情報が満ち溢れていて、家庭や学校でも教材として利用されています。こうした教材を有効に使うことによって学習効果が得られるのは確かです。情報収集も大きく進展することでしょう。ただし注意すべき点としては、脳の発達上の問題、さらにはICTへの依存症の問題です。私たちの脳は、数百万年もかけて直接的な感覚刺激によって進化してきました。そのため、実際とは異なる感覚刺激に対しては錯覚を起こすことになります。その結果として、自然界の刺激や対人関係に対する関心が薄れるという大きな問題を抱えることになり、諸外国でも問題視されています。

長時間にわたるスマートフォン等の使い過ぎの一方で、全身を使った遊びの不足が子どもの心身の発達に悪影響を及ぼすことが様々な研究からも明らかにされています。ICT自体が問題なのではなく、その使い方に問題があります。幼いころに経験すべきこと、つまり、受けるべき刺激を受け、行うべき運動をする・・・、こうした経験を積むことが立派に成長していく上での糧となることでしょう。

小さな赤ちゃんから少年少女への道のりでは、幼いがゆえにその時にこそ学べることがあります。子育てに奮闘している皆様の子ども達が、健やかに子育ての道を歩むことを心から願う次第です。



妊娠、出産、子育てについて お気軽にご相談ください。

◆ 妊娠、出産、子育てについて

- 健康推進課 電話 0748-33-4252 FAX 0748-34-6612

◆ 子育て支援の利用について

- 子育て支援課 電話 0748-36-5562 FAX 0748-32-6518

◆ 保育所等の入所について

- 幼児課 電話 0748-36-5507 FAX 0748-32-6518

◆ 発達の不安や悩みについて

- 発達支援課 電話 0748-31-3734 FAX 0748-31-3738

◆ 教育について

- 学校教育課 電話 0748-36-5531 FAX 0748-32-3352

◆ スポーツや運動施設の利用について

- スポーツ課 電話 0748-33-6303 FAX 0748-33-3124

◆ 絵本の読み聞かせについて

- 近江八幡図書館 電話 0748-32-4090 FAX 0748-32-4099
安土図書館 電話 0748-46-6479 FAX 0748-46-6591

令和5年3月発行

監 修／荒木秀夫（徳島大学名誉教授）

発 行・編 集／近江八幡市 子ども健康部 健康推進課

〒523-0894 滋賀県近江八幡市中村町 25 番地

TEL0748-33-4252 FAX0748-34-6612

010836 @ city.omihachiman.lg.jp